

氏 名	なかむら おさむ 中 村 治
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	論 人 博 第 23 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	洛北岩倉における精神病患者預かりの伝統の形成と消失

論文調査委員	(主 査) 教 授 新宮一成 教 授 伊從 勉 教 授 小山静子 教 授 杉万俊夫 教 授 岡田敬司 教 授 大東祥孝 助教授 多賀 茂
--------	--

論 文 内 容 の 要 旨

京都の洛北岩倉には、後三条天皇（在位1068年～1072年）の第三皇女が精神病になった時、岩倉の大雲寺の観世音に祈願し、大雲寺の井戸水を飲んでいたところ、その病が治ったという伝承があり、古くから精神病患者が岩倉に集まり、農家や茶屋（茶屋は大正時代中頃、つまり1920年頃からは保養所と呼ばれるようになるが、以下の記述では茶屋という表記で統一する）などに宿泊して、看護されていた。明治時代になると、岩倉の農家や茶屋における精神病患者預かりは、医療を伴っていないという理由で批判されたが、それにもかかわらず続けられ、昭和時代初期にその最盛期を迎えたのであった。しかしそれは第二次世界大戦による食糧不足によってほぼ消滅し、1950年に精神衛生法が施行されて、ほとんどなくなった。そして日本では精神病患者は入院して治療されるようになっていった。

ところが1960年頃から、欧米では精神病患者を地域で看護するという試みが積極的に行われるようになり、精神科病床数が大幅に減っていった。日本でも地域で精神病患者を看護することの重要性がやがて気づかれ、岩倉は日本における開放精神医療発祥の地として、すなわち地域において精神病患者を看護していた所として注目されるようになってきたのであるが、岩倉の茶屋や農家における精神病患者預かりは、消滅してからかなり時間がたっており、その歴史、実態がわからなくなってきている。岩倉の茶屋や農家における精神病患者預かりは、実際にはいつ始まったのか。明治時代に批判され、禁止されたにもかかわらず、昭和時代初期にその最盛期を迎えたのはなぜか。岩倉では、茶屋や農家に精神病患者は預けられて、暮らしていたのに、日本の他の地域ではそのようなことがほとんどなかったのはなぜか。岩倉の茶屋や農家における精神病患者預かりは、第二次世界大戦に伴う食糧難、精神衛生法の施行などの外的原因によって終わったようにも思われるが、はたしてそうなのか。本論は、このような問題を中心に、岩倉における精神病患者預かりの歴史と実態を解明する試みである。そしてそのことを通じて、日本、さらには世界における精神医療の流れを具体的に知る試みであり、さらにまた、地域社会において精神病患者を看護していくことに対する手がかりを得る試みでもある。その概略は以下のとおりである。

本論の第1部は、西洋における精神医療の動向を古代から、日本におけるそれを幕末から概観し、世界における精神医療の動向がどのように日本に流れ込んだかを、岩倉についての日本の医療行政の資料を発掘することによって明らかにしている。また、岩倉についてなされてきた言及を検討し、岩倉の精神病患者預かりが必ずしも実際の資料に基づいてではなく、世界と日本における精神医療の趨勢を反映して抽象的に論じられてきたことを見出し、本研究の狙いを、実証的な検証に定めている。

第2部は、岩倉における精神病患者預かりの始まりについて考察し、岩倉に精神病患者が集まり始めたのは18世紀中頃であることを新資料に基づき推定している。また、明治時代に入って医療なしに精神病患者を預かることに対する批判が高まり、岩倉にも精神病院ができ、さらに精神病患者監護法の施行（1900年）により、茶屋や農家において精神病患者を預かることは禁止されたにもかかわらず、なくならなかった主な理由は、次の2点であると論じている。すなわち、(1)精神病院がほとんどないのに、精神病患者数が急増したこと、(2)精神病院法の施行（1919年）によって貧困家庭の精神病患者が公費で入院させてもら

えるようになった結果、非貧困層の家庭が、家族の精神病患者を私宅監置させると体裁が悪くなり、病院よりは経費の安い精神病患者預かり所として茶屋や農家を求めるようになったことにより、精神病患者預かりが黙認されて、岩倉にできた精神病院の側でも、この伝統と共存する道を選んだこと、この2点である。その結果、昭和10年代には病院の入院患者数は500人を越え、茶屋や農家にも300人ほどが滞在することになった。

第3部は、他の地域では困難であった精神病患者家族的看護が岩倉において可能であった理由を考察し、(1)精神病の治療実績、(2)町からの適当な距離、(3)隔離地として適当な地形、(4)現金はないものの食糧は十分にある暮らし、(5)精神病患者預かりが地域に経済的な潤いを与えたこと、(6)地域の内部に精神病患者が滞在し村人と共に生活を送ることに重点を置いたことの他に、(7)長年に渡って形成されていた里子預かりの伝統による「人を預かること」に対する慣れ等を理由として挙げている。この(7)に関しては、里子も精神病患者も共に預かった経験のある2軒の農家の聞き取り調査によって裏付けている。

第4部は、精神病患者家族的看護が終わった理由として、第二次世界大戦に伴う食糧難、精神衛生法の施行の他に、暮らしの変化も挙げ、交通手段の発達によって京都へ通勤できるようになると、岩倉の人が精神病患者預かりから離れ、農作業や日々の暮らしに機械が導入されると、精神病患者に頼まねばならない仕事が無くなったからであると論じている。この変化については豊富な写真資料によって具体的に示している。

以上の議論をふまえ、「終わりに」では、地域社会で精神病患者を看護していくためには、地域における精神病患者預かりを単に黙認するだけでなく、その意義を評価し、病院への入院が必要な人、地域での看護が適切な人を振り分けていくシステムの構築が必要であり、また、精神病患者預かりが地域に経済的な潤いを与えるシステムを構築することも必要であり、さらにまた、「精神病患者を預かる人の精神病患者に対する慣れ」「精神病患者に対する地域の人の慣れ」も形成していく必要もあるのではないかと論じている。

論文審査の結果の要旨

本申請論文は、京都洛北岩倉地区において行われていた精神病患者預かりの具体像を、古文書などの資料と聞き取り調査とによって明確にした研究である。

岩倉地区では、主として京都市内からの精神病患者を預かって看護をする伝統があった。宗教的な精神病治療のために患者が集まる場所は日本の各地にあったが、家族に付き添われて来るのが常であり、岩倉のようにその土地の農家や茶屋に長らく預けられて家族的看護を受けるという例は他には見当たらない。西洋の精神医学が日本に入り始めて間もなく、岩倉の精神病患者預かりは、精神病患者を隔離収容するのではなく地域で受け入れて社会復帰に導くという開放医療の理念を体現するものとして、明治末期より西洋からの見学者に好意的に紹介されて有名になったが、そのためにかえって伝説的な色彩を帯びるようになり、現実的にこの伝統が消失した現在、その内実の実証的な記録と分析とが、欠けたままになっていることが惜しまれていた。本申請論文は、この伝統を経験してきた当事者が生き残っている間に可能になったおそらく最後の本格的な聞き取り調査を含む実証的な研究であって、日本の精神医学史と京都の地域研究に、その高い資料性と分析の視野の広さによって大きく貢献するものである。

岩倉の精神病患者預かりの歴史的事実について、本申請論文は、自ら古文書を渉猟して近代以前の状況から説き起こしている。11世紀に、ある皇女が精神病になったとき、岩倉の大雲寺に祈願して病平癒を得たという記録があることは以前から知られていたが、これだけを強調すると、あたかも古代から、岩倉で精神病患者を看護してきたかのように受け取られかねない。しかし、現存する資料によって確かめられることから推測すると、岩倉大雲寺に病人が平癒を願って参籠するようになったのは17世紀の終わりから18世紀の初めにかけてであり、その頃はとくに眼病に霊験があると信じられていた。精神病についての記録は18世紀の中頃から存在し、18世紀の終わりに至って、初めて組織的な精神病患者預かりの取り組みが記録されるようになったと考えられる。1800年前後の古文書の本申請論文による調査によって、大雲寺と、周辺の茶屋との間の、精神病患者預かりの主導権をめぐるやりとりが判明している。

さらに本申請論文は、日本に西洋近代精神医学が導入されてからの激動を、主に当時の公文書を調査することによって理解可能なものにしていく。西洋近代精神医学では、精神病患者を放置せず、精神病院に入院させることによって治療を施すということが理念的に正しいとされていた。すなわち精神病院は、精神の安定にとって望ましい環境を提供することのできる

場所ではなくてはならず、いきおい広大な敷地を備えた大規模な施設となった。精神障害をめぐる日本の近代化政策も、その路線に沿って進められようとしていた。岩倉の精神病患者預かりも、いったんは禁止された。しかし、日本では経済的な裏付けを与えなかったためにこの政策は徹底されなかった。一方では、すでに西洋において、隔離収容を行って患者を社会から引き離してしまうことの弊害も認識されていた。岩倉の精神病患者預かりは、地域で患者を受け入れてこの弊害を払拭する理想的な形態を示していると、西洋の学者によって認識され、また岩倉に新設された近代的病院の長も、同様の認識を示し、日本の当局も黙認し、こうして岩倉の精神病患者預かりはむしろ発展して1930年頃に最盛期を迎えることになった。本申請論文は、この経緯を一次資料に基づいて綿密に再構成し、西洋の学者が岩倉を訪問したときの写真なども新資料として発掘し、日本において公的には精神病患者預かりが禁止されたにもかかわらず、なぜ滅びずにむしろ発展したのかという従来の学界における疑問に、解決の道を与えた。

本申請論文はさらに、岩倉の精神病患者預かりに携わった最後の世代の人々に聞き取り調査を行い、それを資料によって裏付けながら、この伝統を可能とした社会経済的な要因について、独自の見解を展開している。すなわち、岩倉は高い農業生産性を有しながら、地理的条件によって、その産物が京都への流通に回されず、精神病患者がそこで暮らしてゆくための食料が豊富にあった。この条件は、精神病患者預かりが組織的に行われるようになるのと並行して、岩倉の里子預かりの伝統の中にも生かされていた。里子を預かるのも精神病患者を預かるのも、他人の子を預かるという点では同じであり、人々は生活の中で、このことに関する慣れを徐々に形成し、また、預けられた里子や精神病患者も、農業を手伝うという形で、自分が必要とされているという感覚を持つことができた。他人の子を預かるということは、里子の場合も精神病患者の場合も現金収入をもたらす、この地域を単に孤立した農村とせず、都とのつかず離れずの相互関係を保った経済圏の中に安定的に維持するのに役立ったのである。くわえて、里子は決して珍しい現象ではなく、宮家からの里子もあり、岩倉は社会的な威信をこれによって保つこともできていたから、里子の場合と同様に精神病患者を預かることへの抵抗も少なかった。本申請論文は、残存している文書に基づき、精神病患者を預かってもらうのにいくらの費用がかかったかということをも示しているが、その大きさは、この伝統の定着にとって経済的要因が果たした重要な役割を物語っている。

このように本申請論文は、岩倉における精神病患者預かりの維持を可能にした社会経済的条件を実証的に示し、引き続きそれによって、第二次世界大戦後にこの伝統が急速に廃れていった理由をも、明らかにしている。すなわち、鉄道や道路が開通すると、現金収入の道が多様になり、里子や精神病患者を預かる理由が薄れ、また農業の衰退は、預けられた側が、自分が必要とされているという意識をもつ機会が減ることを意味していた。さらに、新しく施行された法律のもとで、精神病患者を預かっていた岩倉の旧来の保養所は、公費や保険制度で運営される精神病院へと経営形態を変えた。こうして民家で精神病患者を預かって、一つの地域社会全体がそのことへの「慣れ」を形成しているという希有な伝統は、崩れ去っていった。

このように、本申請論文は、岩倉の精神病患者預かりという、精神医学にとってのみならず歴史社会的に意味ある伝統に、全体的な展望と洞察を与える重要な業績である。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年12月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。